Music Dialogue ディスカバリー・シリーズ 2019-20　Vol. 2
築地本願寺　本堂 2 階 講堂

2019 年 9 月 20 日（金）19:00 開演（18:30 開場）

<u>プログラム</u>

◆J. ブラームス (1833-1897) ： 弦楽六重奏曲 第 1 番 変ロ長調 Op.18
J. Brahms: String Sextet No. 1 in B flat major, Op. 18
第 1 楽章 Allegro ma non troppo
第 2 楽章 Andante ma moderato
第 3 楽章 Scherzo. Allegro molto
第 4 楽章 Rondo. Poco Allegretto e grazioso

◆A. シェーンベルグ (1874–1951) ：「浄夜」 Op. 4
A. Schoenberg: Verklärte Nacht (Transfigured Night), Op. 4

休憩

お客様とのダイアローグ

［共催］一般社団法人 Music Dialogue
［協力］日本音楽財団（日本財団助成事業）
［認定］公益社団法人 企業メセナ協議会

企業メセナ協議会
助成認定活動

演奏者プロフィール

石上 真由子　Mayuko Ishigami　[ヴァイオリン]
8 歳の時にローマ国際音楽祭に招待される。第 77 回日本音楽コンクール第 2 位、併せて聴衆賞及び E・ナカミチ賞受賞。その他、国内外のコンクールで優勝・受賞。NHKFM 名曲リサイタルやリサイタル・ノヴァに出演。東京交響楽団、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、ブラショフ国立交響楽団など、国内外でオーケストラと共演。海外の音楽祭にも多数出演。ソロ活動と共に長岡京室内アンサンブル、アンサンブル九条山のメンバーとしても活躍。Ensemble Amoibe シリーズ主宰。Music Dialogue アーティスト。CHANEL Pygmalion Days 室内楽アーティスト。京都コンサートホール第 1 期登録アーティスト。日本コロムビアより CD「ヤナーチェク:ヴァイオリン・ソナタ」好評発売中。（写真 ©Shuzo-Ogushi）

伊東 真奈　Mana Ito　[ヴァイオリン]
奈良県出身。東京藝術大学音楽学部を経て、同大学院修士課程修了。院在学中にパリのスコラカントルム音楽院に 2 年留学、ディプロム取得。現在、読売日本交響楽団ヴァイオリン奏者。京都芸術祭毎日新聞社賞受賞。松方ホール音楽奨励賞受賞。大学卒業時に同声会賞受賞。リゾナーレ室内楽セミナーにて「緑の風賞」受賞。JT が育てるアンサンブルシリーズ、六花亭コンサート、ムジークフェストなら等に出演。Music Dialogue アーティスト。これまでに、高木和弘、小栗まち絵、澤和樹、森悠子、G・プーレ、J・P・ヴァレーズ、安紀ソリエール、玉井菜採の各氏に師事。

中 惠菜　Meguna Naka [ヴィオラ]
1993 年生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。 Quartet Amabile のヴィオラ奏者として、2016 年第 65 回 ARD ミュンヘン国際音楽コンクール弦楽四重奏部門 第 3 位に入賞、合わせて委嘱新作特別賞を受賞。第 5 回 次代へ伝えたい名曲 今井信子ヴィオラ・リサイタルにて、今井信子氏と共演。 2019 年度 CHANEL Pygmalion Days 室内楽アーティスト。ヴィオラを佐々木亮の各氏に師事。 現在ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン マスター課程に入学し、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のヴィオラ奏者である、ヴァルター・キュスナー氏の元で研鑽を積む。

大山 平一郎　Heiichiro Ohyama　[ヴィオラ]
米国サンタバーバラ室内管弦楽団・音楽監督兼常任指揮者、シャネル・ピグマリオン・デイズ・室内楽シリーズ アーティスティック・ ディレクター、Music Dialogue 代表。英国のギルドホール音楽学校を卒業。1979 年にジュリーニ率いるロスアンジェルス交響楽団の首席ヴィオラ奏者に任命され、1987 年にプレヴィンから同楽団の副指揮者に任命される。九州交響楽団の常任指揮者、大阪交響楽団の音楽顧問・首席指揮者等を歴任。室内楽の分野では、サンタフェ室内楽音楽祭やラホイヤ・サマーフェスト、ながさき音楽祭などで芸術監督をつとめた。2003 年に 30 年 にわたるカリフォルニア大学教授職を終える。2005 年に“福岡市文化賞”、2008 年に文化庁“芸術祭優秀賞”、2014 年にサンタバーバラ市の “文化功労賞” を受賞。

辻本 玲 Rei Tsujimoto [チェロ]
東京藝術大学音楽学部器楽科を首席で卒業。その後シベリウス・アカデミー、ベルン芸術大学に留学。第 72 回日本音楽コンクール第 2 位。2007 年度青山音楽賞新人賞受賞。2009 年ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール第 3 位入賞（日本人最高位）。2013 年齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・チェロ奏者。使用楽器は NPO 法人イエロー・エンジェルより 1724 年製作のアントニオ・ストラディヴァリウスを、弓は匿名のコレクターより Tourte を特別に貸与されている。Music Dialogue アーティスト。

金子 鈴太郎 Rintaro Kaneko [チェロ]
桐朋学園ソリスト・ディプロマコースを経て、ハンガリー国立リスト音楽院に学ぶ。国内外のコンクールで優勝、入賞。2003 年～2007 年 大阪交響楽団首席チェロ奏者、2007 年～2008 年 大阪交響楽団特別首席チェロ奏者。現在は各オーケストラにゲスト首席として招聘されるほか、サイトウ・キネン・オーケストラ等で活躍中。トウキョウ・モーツァルトプレーヤーズ首席、Super Trio 3℃、長岡京室内アンサンブル、東京バロックプレイヤーズ 各メンバー。Music Dialogue アーティスト。オフィシャルサイト http://rintaro.online.fr/
（写真 ©Nobuo MIKAWA）

山岸園子 Sonoko Yamagishi [司会]
聖心女子大学文学部歴史社会学科卒業。グロービス経営大学院（MBA）修了。株式会社リンクアンドモチベーションにて、人材育成や組織風土改革に関する業務に従事。若年層向け教育サービスを提供する新会社立ち上げを担当した。その後株式会社グロービスに入社し、現在は経営大学院／グロービス・マネジメント・スクールにて、マーケティング・学生募集部門の戦略立案やチームマネジメントを担当している。12 歳からヴィオラを始め、現在もアマチュアオーケストラなどで演奏している。

ディスカバリー・シリーズの開催にあたり、こちらの団体・個人様よりご支援頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。
日本音楽財団様、福羽泰紀様、匿名希望 6 名様 （順不同）

演奏作品について

J. ブラームス (1833-1897) ： 弦楽六重奏曲 第 1 番 変ロ長調 Op.18 (1859–60 年作曲)

ブラームスが 26 歳を迎える年に書かれた作品です。弦楽六重奏という編成は当時ほとんど先例のない珍しいものでした。ベートーヴェンやハイドン、モーツァルトといった先達を常に意識していたブラームスも、この編成ならプレッシャーを感じずに腕を振るうことができたのです。また、「ヴィオラとチェロが 2 本ずつ」という編成は中低音好きの彼にうってつけでもありました。

やがてブラームスは「伝統の正当な継承者」として自他共に認める作曲家になりますが、その一つの画期となったのが本作の書かれた時期でした。彼はバロック時代や古典派時代のすぐれた作品を研究し、その粋を継承しています。本作では、バロック時代の様式に範を取った第 2 楽章の変奏曲にその一端を見ることができます。ブラームスは「変奏曲の作曲家」と言われるほど変奏の技術に長け、またこれを愛しました。旋律を小さなモチーフに分解し、それらを変形、展開することで組み立てていく手法はブラームスの作曲方法の核心でもあります。彼は 20 代後半にあたるこの時期にそれを確立したのです。

第 1 楽章はチェロの伸びやかな旋律で開始され、中低音の充実を活かした暖かなサウンドが特徴です。第 2 楽章はバロック時代に流行した「パッサカリア」風の変奏曲です。主題と 6 つの変奏曲で構成されています。第 3 楽章は快活なスケルツォ。3 拍子で書かれていますが、シンコペーションやアクセントによって強拍の位置がずらされ、どこか不思議な拍感になっているのがポイントです。中間部に入ると通常の 3 拍子通りのアクセントになり、速度の上昇と相まってドライブ感が生み出されています。第 4 楽章は第 1 楽章を回想しながら、様々な楽想をサンドイッチのように挟みながら展開していきます。

A. シェーンベルグ (1874–1951) ：「浄夜」 Op. 4 (1899 年作曲)

「浄夜」または「浄められた夜」と呼ばれる本作は、ドイツの詩人 R.デーメル（1863-1920）の同名の詩に触発されて作曲されました。月明かりの下、母になることを願った女性が過ちを告白し、それを聞いた男性は彼女とおなかの子を受け入れる・・・という内容です。音楽は詩の内容に基づく 5 つの部分で構成され、切れ目なく演奏されます。

シェーンベルグは長年クラシック音楽を支配してきたルールを 1 2 音技法によって打ち破り、前衛音楽へと扉を開いた作曲家として知られています。しかし彼は伝統の継承者を自認し、偉大な先輩たちから多くの粋を受け継ぎました。なかでも彼はブラームスを敬愛し、本作をはじめとする初期の作品には特にその影響が現れています。

まず、弦楽六重奏という編成を選んでいることが、ブラームスの傑作に対する意識を伺わせます。さらに、旋律を細かい単位に分解し、それを使って楽曲を構成すること、拍節にしばられない不規則な楽節構造といったブラームス譲りの手法が用いられています。楽曲全体に満ちるロマンティックで濃密な雰囲気も「前衛作曲家」というイメージからは想像しづらい豊かな人間味をたたえています。

（解説：鉢村 優）

Music Dialogue ディスカバリー・シリーズ 2019-20 Vol.3

2019 年 12 月 20 日（金）19:00 開演（18:30 開場）@築地本願寺 本堂 2 階 講堂

2019 年 12 月 17 日（火）18:30 開始 @渋谷ホール 字幕解説付きリハーサル

【出演】 酒井有彩（ピアノ）、千葉清加（ヴァイオリン）、城戸かれん（ヴァイオリン）、
大山平一郎（ヴィオラ）、水野優也（チェロ）

【曲目】 モーツアルト ： ピアノ四重奏曲 第 2 番変ホ長調 K493
ブラームス ： ピアノ五重奏曲 ヘ短調作品 34

【料金】 一般 4,000 円 学生 2,000 円 当日精算

【申込】 https://pro.form-mailer.jp/lp/d8dcf3da45981

【共催】 一般社団法人 Music Dialogue

【協力】 日本音楽財団（日本財団助成事業） 【認定】 公益社団法人 企業メセナ協議会